

## 「読書の楽しみ」

2021年03月29日

ある大学教授は本屋に行って、一度に何十万円もの本を買うそうで、羨ましい限りである。年金生活者になって、思うように本を買えない。それを察し、気の毒に思われたのだろうか、5冊の本を貸してくれた方がいる。嬉しく、楽しく読ませてもらった。

朝井まかて著『類』。森鷗外は5人の遺児がいて、末っ子が「類」という名前で、彼に焦点を当てて書かれた小説である。森家の遺族に小説を書くことを了承してもらい、遺児たちが歩んだ生涯の事実を踏まえ、フィクションとして書かれている。類は鷗外の子どもとして期待されたが、応えることができず悶々とする。しかし、苦節しながらも、幸いな人生を送ったのではないか。画家を目指す、挫折し、戦後は生活のために本屋を開業する。最後は文筆家として立つ波乱万丈の生涯であった。父や母、姉たちとの交流を生活感豊かに、かつ時代の変遷を追いながら、ドラマチックに描いている。類の生涯をこれほど多角的に描写した小説家・朝井氏の感性と想像力に富んだ力量に感銘を受けた。小説を読むことが少なくなった私は、改めて、小説の面白さを味わった。

松本清張著『或る「小倉日記」伝』。松本氏が芥川賞を受賞した作品である。森鷗外の『小倉日記』は後に類によって発見されるが、多少、障がいのある田上幸作青年が、10年の歳月をかけて、小倉在住時の森鷗外の足跡をひたむきに調査する姿を描いている。入れ込むということは、こんなことなのかと感嘆するほど、没頭していく。美貌の母との共同調査、病気、貧しさ、偏見に晒されながら、深追いする田上青年に感動する。彼の調査は、鷗外の小倉住まいに光を当てた。松本清張らしい迫力あるタッチで、一気に読んだ。

加賀乙彦著『わたしの芭蕉』。芭蕉の絶句と言われている「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」という句はあまりに寂寥感が漂っていると思っていたが、加賀氏は「まるであまたの枯野をかけめぐっているかのようだ。そしてなんと過去においても多くの枯野の旅をしたものよと誇らしげだ」と、寂寥感でなく、矜持だと解釈している。「蚤虱馬の尿する枕もと」の句には驚いた。弟子たちに歓待された豪華な宴会より、この貧しい宿がお気に入りだ。「荘子」に倣い、権力と財力に奢ることを嫌った芭蕉らしい自然と結び合った句であるという。深い思索を込め、言葉への徹底的なこだわりをもって、詠んでいる。

園府寺司著『ファン・ゴッホ』。ゴッホは牧師の息子で、牧師になろうとしていた。彼の絵には宗教画は少ないが、深いところで信仰を表わしている。『ひまわり』の絵はゴッホを代表する絵で、ひまわりはただ黄色い花ではなく、「信仰心」や「愛」といった西洋の図像的伝統があり、ゴッホも聖なるイメージと結びつけていた。私はなぜ、萎れたひまわりを描いたのか不思議に思っていたが、太陽を見失おうとしている自分の死を象徴しているかのようだという。苦悩と病魔に襲われながら、描かずにはいられないゴッホの37年の短い生涯は圧巻である。芭蕉とゴッホは、分野を全く異にするが、芸術的天才の研ぎ澄まされた感性は、常人には上っ面しか受け止めていないのだと思った。

半藤一利著『決定版 日本のおいちばん長い日』。ポツダム宣言を受諾し、天皇の詔勅が発表されるまでの政権中枢の動きを描いたノン・フィクションである。天皇は受諾を受け入れるが、徹底抗戦を叫ぶ陸軍に引きずられ、苦悩する一日の時間を追って、リアルに描写している。今になれば、客観的な事実を知っているから言えるのであるが、天皇制イデオロギーに洗脳された悲劇以外の何ものでもない。無為に殺されていった人々の無念さはいかほどかと同情する。読書は知らなかったことを教えてくれ、「楽しい」の一語に尽きる。